

勝負する

英語

今北純一

Junichi Imakita



Creative Communication

勝負する 英語

今北純
Junichi Imakita

工業学院図書館
蔵書章



しょうぶ
勝負する英語

いまきたじゆんいち
今北 純一

発行——1996年 8月30日

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替00140-5-808

電話——編集部 03・3266・5411
読者係 03・3266・5111

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Junichi Imakita 1996, Printed in Japan

ISBN4-10-370503-5 C0082

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

勝負する英語 * 目次

対決

HOW MUCH DO YOU WANT?

10

愚問の処理法

13

作用反作用の法則

18

忠告の鈴

23

「相の手」の暴力

30

男の論理と女の論理

35

土俵際のうっちゃり

40

英語表現のSNAPSHOT 1・2

45

拒絶と文句

断り状の隘路

48

I'll call you.

52

スノビズムの誘惑

56

待ったなしの駆引き 60

行列待ちの作法 65

慇懃無礼 69

英語表現のSNAPSHOT 3

75

交渉と反撃

“Sleep on”の効用 78

不機嫌の押し売り 81

“I am sorry.”の反撃 85

ユーモアのドツブラー効果 90

符牒のグレード 94

誤解の火種 98

英語表現のSNAPSHOT 4・5

臨機応変

NOT YET! 106

三色書きのメモランダム 109

防衛本能 114

議長の気転 117

不意打ちインタビューでのアドリブ

英語表現のSNAPSHOT 6・7

129 124

度 胸

不可能な人 132

公開質問のKick off 137

プロフェッショナルの条件 142

色即是空の世界 147

今は昔…… 153

発 見

表現の写像 160

19.15 for 19.45 163

肩書インフレの正体 168

耳慣れない言葉 171

将棋の国境 175

最初の例文 180

ボトムアップとトップダウン 185

サイバースペース
電脳空間の英語 190

あとがき 200

装画 * 羽山 惠
装幀 * 新潮社装幀室

勝負する英語



対

決



■ HOW MUCH DO YOU WANT?

How much do you want? 中学生でも言えるこんな簡単な質問をまともに受けて、私がその場で立ち往生してしまったのは、もう二十年も前のことである。それほど昔のことなのに、あの時のシーンは、今でも鮮やかに私の記憶によみがえる。それは、私がまだオックスフォード大学の招聘教官をしていた時におこった。

フェローシップの契約任期が終りに近づき、次のステップへの準備を始めていた私は、ある英国系コングロメイトからコンタクトを受けた。スカウトの話だった。私は、そのグループの本社のあるロンドンに赴いた。経営幹部とのインタビューのためである。相手は一人。一対一のインタビューだった。二言、三言挨拶がわりの言葉をかわしたあと、相手はいきなり本題に入ってきた。随分と大柄な体格の人で、腰かけているソファを全部占領するような迫力でストリートに切り込んでくる。それでも私は意外に落ち着いていた。そして、自分がそれまでにプログラムしてきたキャリアについて、ポイント、ポイントを珠数つなぎにしながらプレゼンテーションを進めていった。

日本の大学で応用物理と化学工学を専攻したこと。修士号取得後、企業に入り実務経験を積ん

だこと。その間、ティーチング・アシスタントとしてニューヨークの大学に留学したこと。そしてオックスフォード大学の招聘教官として、技術と経済の接面分野 (Techno-Economics) を手がけていることなどを、有機的に組み合わせながら私はしゃべり続けた。私の口は、自分でも驚くほどなめらかであった。相手の表情から伝わってくる反応もいい。この調子なら、このインタビューは成功だ。私の気持の中でそんな打算がふつと芽生えた正にその時、そのことをあたかも察知したかのごとくに相手が私に繰り出したのが、How much do you want? という質問であった。

この質問を受けた瞬間、私はただ呆然としてしまった。そして次の瞬間、それは狼狽へと移行した。それまで理路整然と組み立てていたはずの私のロジックは、たわいもなくどこかへ吹き飛んでしまっていた。私の頭の中の論理回路は次々にショートをおこし、考えは混乱した。結局のところ、相手のこの質問に対する答は、私の口から出ることはなかった。

両者の会話の突然のとぎれを、そのあとどうとりつくろって退席したかは全く覚えていない。ただ、オフィスの外へ出た私の気持は沈んでいた。一対一の戦いに敗れたという思いのゆえに、身体全部が一気に憔悴し切ってしまった。その重苦しい感覚は、オックスフォードに戻ってからもしばらく私の気持の中でくすぶっていた。

インタビューの日から数えて何週間かたったある日、私の手もとに見覚えのある差出人からの手紙が届けられた。ロンドンでインタビューを受けた会社からであった。開けるまでもない。手紙の中味はわかっている。否定文を覚悟で封を切ってみると、しかし、それは何と、先方からの

オフィスのコンファメーションであった。一体どうなっているのだろう。あの質問を受けた途端あわてたじろぎ、それまでの順調な対話に致命的な空白を作ってしまったと考えたのは、私一人の単なる思い過ごしであつたのだろうか。いや、そんなことはない。あの質問は私の思考を確かに一瞬停止させた。それほどまでに私にとって手ごわい質問であつた。しかし、結果から判断する限り、それは、相手の英国人にとっては、*What time is it now?* くらいの次元の話であつた。

自分の能力を大上段に構えてぐいぐいと売り込んでいく。これは、ふつうの日本人にとっては不得手なことだ。そんな訓練は日頃受けていないからだ。

交渉に臨むからには、私も、自分の能力を定性的には最大限にプレゼンテーションすべく、周到な用意をしてみたつもりだ。だが、自分の能力の客観的な商品価値を定量化する、という作業は、それまでの一度も試みたことがなかった。だからこそ、私には、*How much do you want?* に対しての即答ができなかつたのである。当然のことながら、これは英語の問題ではない。

最近、「英語は丸暗記だけではだめだ、しゃべる内容がなければ」、といった声をよく耳にする。それはその通りで、いくら機械的な詰め込みを重ねても、いざという時、話すべき何かを自らが持つていなければどうにもならない。しかしながら、この二つの方法論の間にはあまりにもギャップがあり過ぎる。それは、とりもなおさず、「単語や言い回しを暗記する」という具体論と、「自分自身の主義・主張を持つ」という抽象論とのギャップである。この二つをつなぐもの、それは実践しかない。それも名刺の肩書をバックにした組織の一員としてではなく、一個人として

勝負するという場面を自ら積極的に創り出し、その場その場でハードルをクリアしていくという地道な作業をいとわない、ということである。そのことを、私は、How much do you want? の質問から学んだような気がする。最終的には、私は、この英国系コングロマリットからのオファーは辞退して、別のステップを選択したのだが、あのロンドンでのインタビューが、私に一つの意識革命をもたらしたことだけは間違いない。

■愚問の処理法

今から十年くらい前の全仏オープン・テニス選手権の一回戦か二回戦だったように思うが、当時、プレーヤーとしては既に下り坂にかかっていたとはいえ、いまだに第一線のプロとして活躍していたジミー・コナーズが、世界ランキング下位の選手にかなり手こずった。コナーズは、まあ何とかこの試合に勝ちをおさめはしたが、両者の実力の差からはとても想像つかないほどのロング・ゲームであった。そして、試合終了直後、テレビのスポーツ番組のレポーターが、強いフランス訛りのアクセントでコナーズにこう質問した。

“Jimmy, you had to run a lot today. Was he tough?” (ジミー「コナーズのファースト・ネーム、

ジェームズの愛称)、今日は随分走られましたね。相手は手ごわかったですか?)

汗びっしょり、しかもまだ肩で息をしているコナーズは、慄然とした表情で、そのレポーターに面と向って、

“What a stupid question!” (何たる愚問!)と投げ捨てるようにひと言いつて、そのままコートを立ち去り、選手控室の方へと消えてしまった。あとに残されたレポーターは、いかにもきまり悪そうに、

「どうもあまり御機嫌がよろしくないようです」と、その場を何とか取り繕ったが、テレビ中継を見ていた私には、コナーズが怒った理由がわかったような気がした。

そもそも全仏オープンに出てくるような選手は、たとえ世界ランキングが下位であろうと、決してあなどれない力を誰もが持っている。ただ、コナーズにしてみれば、おそらく公式戦で初めてあたったと思われるこの日の対戦相手についての予備知識がなかった。そこで、打ち合いながら相手の実力のほどを探ろうとするのだが、その手の内を読めないままに、試合がズルズルと長引き、自分のテニスができないフラストレーションを募らせる。それでも我慢するところを我慢して、コナーズはやつとのことで相手を仕留めたのだった。敗けていてもおかしくなかった。番狂わせというのは、そうやって時たま起こるものだ。しかし、だからといって実力が伯仲していたわけでは全くない。そこには初顔合わせというファクターと、もう一つ、長年王者として君臨したコナーズからすれば、相手はまだ駆け出しの選手で、最初から本気にはなれない、という事情もあった。そういう背景を一切度外視して、スコアの上で接戦だったということだけに焦点を